

る。

もっとも岡倉の場合、九鬼と接触する以前に、大学の恩師フェノロサから古美術に接する機会を与えられていた。フェノロサは明治十三年以降毎年の夏休みに関西へ行き、古美術品の見学や収集を行ったが、その最初の旅行のとき、大学を卒業したばかりの岡倉を通訳として同伴（ほかに狩野友信、住吉広賢らも同行）したのである。日本美術史を本格的に研究し始めた師のもとで、岡倉もまた勉強を始めたのであった。そして、そこに胚胎した日本美術復興の夢が、彼をして美術局設立運動へ走らせたものと思われる。

明治十七年の古社寺調査

明治十七年六月下旬から九月中旬にかけて、フェノロサ、岡倉寛三らは京都、奈良方面の主な古社寺の宝物調査を行った。ビゲロウ、柏木貨一郎、安藤広近らが一行に加わり、奈良では加納鉄哉も加わったようである。フェノロサは、個人的にはこの種の旅行を毎年行っていたが、今回は文部省が岡倉の派遣というかたちで力を借していたので、かつて無く徹底した調査となった。フェノロサのモース宛書簡にはこの調査のことが次のように記されている。

拝啓 この夏は大変でした。二ヶ月半の間博士―ビゲロウと一緒に文部省の役人を伴って出かけておりました。文部省は私に随行して美術調査に従事させるよう特別な任務を課して役人を派遣したのです。私たちは政府の書状や命令書を携行し、山

城・大和の主要な古社寺は片端から回って来ました。あるいは土蔵の隅々をほじくり、また千三百年前に建てられた塔の最上層で、積み重なった残骸の一番底から何体かの影像を掘り出したのです。言うなれば日本の中心的社寺に所蔵される偉大な美術文化財の、最初の正確なリストを作ったわけです。私たちは長い間これら個々の作品にまつわりついていた伝承を覆えしました。博士は二百枚の写真を撮り、私は絵画彫刻作品のスケッチを数えきれぬほど描きました。今までまったく埋もれていた六世紀から九世紀までの日本美術の歴史を再現し得たのは何よりのことでした。かつて人の目に触れたことのない多くの作品を比較研究し、それに基づいて立てた一連の綿密な推論によるものです。どこへ行っても寺僧たちは私の鑑定状を欲しがります。私は今まで皆目伝来の不明だった作品について鑑定状を百枚以上も発行しました。実は中国のものが日本の制作と考えられていたり、あるいはその逆だったり、日本のものでも多くが朝鮮作と考えられていたり、また新しいものが古いとされていたり古いものでもなかには新しいと思われるものがあつたり、個々の制作者の名前に至っては目茶苦茶に混同されていることがわかりました。しかしこれが、何百年にもわたる伝承の結果なのです。もちろん私の見解に疑いを持ち、どうしても信用しない旧弊な老人も何人かいることは当然です。私は彼らが宝物だと考えているものの中に比較的無価値なもののあることを立証し、未知の穴蔵から真の宝石を発掘しようと思つています。ところで重要なことは、そういう目的で私がこの夏の旅行

を予定していることを文部省が知り、何と特別委員に旅費を支給して私に随行させ、私の方式に従って調査させた上、政府に代って真の宝物の所在を突きとめようとしたことです。文部省が美術の問題に手をつけ始めるといふのは大変な事からです。このことについては一、二ヶ月してからもつと詳しくお報らせできると思います。私は九月の中旬まで帰京しませんでした。博士はまだ現地に滞在中です。私は紀元七〇〇年から九〇〇年までに制作された古画数点を入手しました。私の買うものは日本人のためにこの日本に置いておくべきだというのが、日本の識者の以前からの主張でした。実は私は、すでに数多くのきわめて重要な文化財をひそかに購入しているのです。日本人は私にそれを所有していることをまだ気づいておりません。そのすべてが支障なくポストン美術館に永遠に収まってしまふのを私はこの目で見たいものだと思っています。しかしながら、もし宮中とか文部省に私のコレクションを買収したい意向があれば、いろ／＼と考えてみてやはりそれには応ずるのが人間としての務めではないかと思うのです。この点あなたのご意見を伺いたいものです。――後略――

（『フェノロサ上』山口静一著。昭和五十七年四月。三省堂）

フェノロサが特別委員といっているのは岡倉のことである。岡倉はこの年二月にフェノロサらと鑑画会を起こし、また、九鬼隆一の学事視察に随行した後、六月に京阪地方古社寺調査を命ぜられてフェノロサと同行したのである。フェノロサのいうとおり、岡倉の派

遣は確かに意義深いものであって、それは文部省が古美術保護に乗り出したこと、いい替えれば九鬼・岡倉提携による保護行政推進計画の第一着手を意味するものであった。その計画はまた前述の美術局設立運動と根を同じくするものであったことはいうまでもない。この調査で、フェノロサと岡倉は古美術品を迷信や伝承から解き放ち、学問的光をあて、保存状況を把握して保護の方法を講じようとした。調査は非常に徹底したものであったようだが、岡倉はその間に「一生の最快事」に遭遇したことを伝えている。すなわち法隆寺夢殿の秘仏との対面である。このことを岡倉は後年、東京美術学校の日本美術史講義で次のように述べている。

夢殿は法隆寺の一部にして、観音は有名なる仏像なり。古来秘仏として人に示さず。余明治十七年頃美術取調のときフェノロサ、加納鉄哉と共に、寺僧を論して秘仏を見んことを請ふ。寺僧の曰く、之れを開かば必ず落雷すべし。明治初年、神仏混交の論かまびす喧しかり時、一度之れを開きしが、忽ちにして一天墨を流し雷鳴あり。衆大いに怖れ、こと半ばにして停む。前例此の如し、復た之れを開かば必ず落雷あらんと、容易に聴き容れず。落雷の事は我等之れを引受く可きを約し、始めて寺僧の承諾を得て堂扉を開かんとす。僧等怖れて皆去る。開けば乃ち千年前の臭気芬々鼻を衝き、堪ぶ可からず。蛛糸を掃ひて漸く進めば、東山時代の器具あり。之れを除きて歩すれば高さ七八尺余のものあり。布、経切等を以て幾重となく之れを包めり。乃ち之れを除かんとすれば蛇鼠驚き出づるあり。布を除けば白紙

を附せるものあり。これ明治初年雷鳴に驚きて中止したる所なり。除き終れば七尺有余の仏像、手に珠を載せ嚴然として立てるを見る。一生の最快事なりといふべし。幸ひに落雷にも遭はざりき。此の仏像は百五十余年前迄は秘仏ならざりしか。夢殿観音の像は珠を持ちて斯く／＼の形なりと『七大寺順礼私記』

に見えたり。秘仏たりし故か、其の彩色判然見るべく、光背焰の如き彩色の存するもの他に比なからん。顔容は上頬高く下頬落つ。これ推古時代仏像の様式を示し、頭部四肢大にして鼻の脇の筋深し。法隆寺の他の諸像に似たり。大体は木造なれども、手の如き或部分は乾漆を用ゐたり。乾漆とは木屑、布等を心として、漆を以て固めたるを云ふ。此の秘仏の内部は頗る鼠類の為に損せられたり。其の他諸所の秘仏、多くは鼠害雨蝕の為に漸々滅滅尽に帰せんとするもの多し。惻然たらざるべからず。然れども秘仏を開きて却て秘仏の価値を失ひ、開かざるに優れるものなきにしもあらず。現に某寺秘仏の如きは巻くに錦欄を以てし、解くに方りては非常の美術品を得たるならんと喜びしに、豈図らん一個燼余の木片を得たるに過ぎず、其の失望謂ふ可からず。これ中古火災に罹り、木像の一片を灰燼中に得て尚ほ之れを秘仏とせるなり。故に初め寺僧の歛心を得んために数日齋戒沐浴せしことも、空しく光陰を消費せしのみなりき。

近來夢殿の観音は寺僧復た秘仏となし、容易に人に示さざると。然れども諸君若し好機会を得ば必ず一見すべきなり。以て益を得ること多かるべし。

岡倉の思想、行動を決定づけたのは何よりもこうした調査の際の感動であり、日本の古美術に対する深い理解であったと考えられる。

なお、この調査についてはフェノロサが詳細なメモ（村形明子編『フェノロサ資料1』に訳出）を残している。また、九鬼隆一も調査に加わったのではないかと思われるが定かではない。九鬼はこの調査が終了したころ（九月）に特命全権公使としてワシントンへ向け出発した。

註1 美術（画術）取調局・美術（画）・学校設置建言書草稿

本学附属図書館所蔵「高橋由一油画史料」中に含まれている。原題なし。二篇とも趣旨説明、計画家から成り、趣旨の点では両篇同工異曲だが計画家では一篇は美術学校・美術取調局設置計画であるに對して一篇は画術取調局・画学校設置計画となっており、また、明治十八年十一月の年記および高橋由一、源吉父子の姓名が記されている。どちらにも西洋美術移植を主眼とする構想が示されている。詳しくは青木茂編『高橋由一油画史料』（昭和五十九年。中央公論美術出版）参照。

なお、浦崎永錫著『日本近代美術発達史（明治篇）』（昭和四十九年。東京美術）には洋画家の美術行政確立運動に関する左記の資料が紹介されている。

(一)「美術教育ノ方針」

小山正太郎（安政四年〜大正五年）が明治十四年に建議したもので、菟藪版印刷物だという。「学校組織」として美術学校（日本絵画、西洋絵画、日本彫刻、西洋彫刻の科を含む）、附属美術工芸学校、附設美術学院の設置を、また、「保護奨励の方法」として学位授与、芸術院・美術会議・美術館・官設美術共進会等の設置、民間美術関係団体の補助、海外留学生派遣、展覧会等のための大会館設立、技術家の国儀拝観特許等の措置を講ずべしという内容である。

(二)美術取調局・美術学校設立の意見書

高橋由一が明治十七、八年ごろ発表したものだという。内容は前出「高橋由一油画資料」中の草稿と酷似しており、推敲を経た感がある。

(三)美術局・美術学校設立の建議書

明治十八、九年ごろ、柳源吉、小山正太郎等十一会の人々が提出したという。内容は(一)と(二)を合体させたものである。

註2

法隆寺夢殿開扉の年についてはこの日本美術史講義中の語句によつて明治十七年とされてきたが、近年これを明治十九年五月七日（このときの調査については岡倉の「奈良古社寺調査手録」の中に短いメモと秘仏観音のスケッチがある。平凡社版『岡倉天心全集』第八巻参照）、ないしはそれ以降の年とする説も現われている。

第三節 図画調査会

図画調査会の概要

フェノロサや岡倉寛三の活動の中で、いつの時点から官立美術学校設立計画が生まれたかを資料的に裏付けることは困難である。ただ、岡倉の場合は美術学校設立に最も重きを置く美術局設立運動に着手した時、すなわち明治十七年には既にその計画があったことは明らかである。一方、フェノロサの場合は明治十七年五、六月の鑑画会講演「画工教育法」（現存する草稿の標題は「日本絵画の将来」*Japanese Painting in the Future*）の時点では設置を非とする『美術真説』講演以来の見解を改めてはいない。それが同年十二月六日開催の文部省図画調査会合における弁論（公立学校に日本式画法を採用することの得失）に至って一転して肯定論となっているのである。この変化は何によるものか判断に苦しむが、考えられることは美術局設立運動が緒につき、必然的に彼もそれに加担することになって説を曲げるに至ったのではないかということである。少なくとも美術学校設立計画はフェノロサではなく、岡倉の脳裏から生まれたものであることは確かであろう。

岡倉は美術局設立運動に着手するとともに、その構想の早い実現をはかるために手近かなところから基礎作りを始めた。その第一着手が文部省図画調査会の設置であった。